

鳥取県現代俳句協会会報

第49号
令和3年11月

御後園の鶴

坂出徹

去年の六月初め、よんどころない用があつて岡山へ出かけた際、少し空き時間ができたので後楽園に行つてみた。園内は人の姿も少なく芝生が

広々として気持ちのいい景色であつた。

左手でしきりに鶴の鳴き声がする。何事かと近寄つてみると、ケージの中で長い棒を持つた人が横に立ち、鶴がさかんに鳴いて羽を広げていた。ちくま文庫、内田百閒集成の「たらちおの記」に「鶴の舞」という文が載つている。

どの子供の時でも、まだ後楽園とは云わなかつた。みんな御後園と呼んでいた。

(百閒の句は) 三島由紀夫が絶賛した散文と似た雰囲気を持っています。いっぽう詩人の平出隆は百閒の句の「欠点」を指摘します。(中略) 百閒の句は、俳句の「切れ」というものへの意識が弱く、せつかく離れてあるものをまた繋ぎなおすような癖がある

以前は鶴が園内を自由に歩いていたとのことなので、さぞよく聞こえたことと思う。ただし手元の野鳥図鑑には「クルウ」とあって「ケレー」という声は百閒だけに聞こえていたのだとも思う。

今年の中国地区現代俳句大会で沼本養卯さんの「百閒やけれいけれど鶴の園」が対馬康子賞を受けられた。御後園の鶴はけれいけど鳴くと

この平出の論は「百鬼園俳句帖」の解説とのことで、改めて読み直し、なるほどと思った。

これまでなぜか百閒の俳句にはあまり食指が動かなかつた。生家跡の碑にある

木蓮や堀の外吹く俄風

にしても、なんとなくびんと来なかつたが、その原因が「文豪と俳句」と平出の解説によつていくらか分かつたような気がした。

さて、次に岡山を訪れる機会があれば、百閒の好きだった大手饅頭を買いに、京橋のたもとの店まで行つてみようか。

夏空や鶴一声にとどまらず

徹

春雷に砂蹴る鶴の足搔かな

鶴の鳴き声はケレー、ケレーと聞こえる。あの長い咽喉から出てくるので、随分遠音がする。

(中略) 地元の後楽園の在る古京の人は、私な

ところで最近「文豪と俳句」(岸本尚毅著、集英社新書)という面白い本が出た。その中に内田百閒の章がある。百閒の句の読み解きと、それぞれが小説や隨筆と関連していることを解説した後に「俳人百閒の『欠点』」という項がある。

中田七重 第一句集『花野』に寄せて

令和二年九月、当協会副会長の中田七重さんが第二句集『花野』を上梓されました。そこで会員の方々に、この句集から、〈私の好きな一句〉を選んでいただきました。

生国は異国なりけり終戦日

足羽 鮮牛

『花野』の柔軟な作品の中より、私的人生体験と重なる句を抽出しました。掲句は特に感情が籠められています。それは「終戦日」のためでしょう。

異國の地で敗戦を突きつけられた邦人たちが、どのような状況下に置かれたか、筆舌に尽し難いのです。作者は中国領だったと聞いているので、私の北朝鮮とは状況が異なつていただかもしれないけど、お互いに生国でもあり、心身に受けたダメージは変りないとと思うのです。当時十一歳の私より、五つ六つ年下の幼い身でよく無事に帰国されたのです。

苛酷な体験をされたことが、世俗を脱却した穏やかな心境となられたのでしょうか。『花野』の一句一句はまさしく作者の心そのものなのです。タイトルの『花野』は記憶の中の生国をイメージ化した景と見ております。

足立 六歩

傘寿はやこはいものなし凌霄花

傘寿はやこはいものなし凌霄花
鬼の豆かぞへ人間まだ途中

とかわして終わる何ともウイットの効いた句集です。目次毎の挿絵をはじめ文学少女のモノローグのような句もあり、それにも惹かれます。

俳句作りに迷うばかりの私にはこの句集『花野』はとても大切なものとなりました。

すむらのりこ

この道が好きたんぽばと鳥のこゑ

いつものように何気なく歩いていた道なのに、ふと気がつけばなんぼが咲いていた鳥のこゑも聞こえる「まあ可愛い。」

日常の色々な事も忘れ鳥のこゑに聞き惚れて、なんて素敵なものであります。

この道を歩くたびに平穏な日々が続きますよう」と、祈らずにはおれない気持ちに、なられたのではと思います。

この道は作者を引き付ける魅力があるのでしょう。

露けしやついそこまでの男下駄

日常の此事をうまく十七音にまとめています。誰に

でも経験あることで、自然に納得してしまいました。いつもの自分の履物がないので目に付いた男下駄。

ついそこまでのつもりで履いたけど重く大きくて持

見る存在です。二冊目の句集『花野』を手にした時は、嬉しさのあまり小躍りしてしまいました。

七重さんの心地よい風の中にいるような十七音の響きは、優しくて包容力があり、いつも癒されています。宝物の句集です。

て余すよう歩きづらかったかもしれませんね。私は男だけれど逆に女物のサンダルなどを履けば、踵に違和感を覚えます。

「露けし」が季語ですから、歩きづらかったうえに足元が濡れてしまつたかもしませんね。

定久しず子

子供の頃私は母がとても好きでした。

そんな事を思い出し乍ら『花野』を開いています。目次毎各二十二句計二百四十二句はひとりの女性の、率直にしてさりげなく記された各十七音の私小説のようです。

春灯や針もつ母のゐるやうな
身に添ふや母が仕立の单帶

そう詠みながら

い気持ちになります。

この句は、口遊むと「七重マジック」でしょうか、童話的な煌きに包まれるようで、自由自在な心持ちになります。

子供の頃、競つてブランコをこいだ遊びの高揚感を思い出しました。楽しい時間は終り「さよなら」の後には、「また明日ね」の約束がいつもありました。「揺れてをり」の静かな語調に、七重さんの大切にされている想いが伝わります。

「待つことを」を強いられるマスク生活の中散歩で通りかかる公園に子供の姿がないのは本当に寂しいことなのですが、コロナ禍なので、次の一句を

ぶらんこのさよならしても揺れてをり
その満天の星のような句集から星を一つ選ぶなど難しいことなのですが、コロナ禍なので、次の一句を

サークスの去んで俄に秋の風

増井ゆり枝

『花野』の中から、この一句を。終戦当时、六歳だった記憶が甦つてきました。食料難の時世、白い飯を求めて、曲芸団や管弦楽団が片田舎へと巡業しました。田舎人にとっては唯一の楽しみでした。もともとサークスには西洋の無言劇の要素が流れているのかも…。象や猿までも共演する面白さがありました。

サークスの少女に憧れた幼年期、その後、秋の風に移ろつた日々。今、冬を迎えようとしています。でも、句集『花野』の一句一句に導かれているようなこの頃です。

吉村 良子

この道はいつか来た道赤のまま

句集『花野』上梓おめでとうございます。

まず絵模様の表紙をみて何故かなつかしさを感じました。また挿絵のひとつひとつにもほつとするものを感じました。

そして、この句を読んだ時、子供の頃田中の畦道を走りまわっていた時のことが思い出されました。それとも昔に返ってきたようだと耳にすることもある昨今の世の中のことを表わされているのでしょうか?

いずれにしても最初にこの句が目に飛び込んできました。

読み進むうち、ひとつひとつの句が胸にしみ、いちいち頷きながら読ませていただきました。素晴らしい句集を有難うございました。

「ありがと」「ひ」の言葉

中田 七重

9月

藤井 久代選

歳時記で「風花」という季語を知った時、あの日の空が甦つた。満州からの引揚船を降りた時の舞鶴港の桟橋、妙に明るい一月の日あたる空からちらほらと漂う小雪、風花の空、美しい言葉だと沁みぐ思つた。そして浮んだ一句「舞鶴と聞けば脳裏に風花す」亡き岸本砂郷先生が地方紙の俳壇で特選をくださつた。

遠い日の俳句との出会いである。

敗戦と混乱と飢餓を生きのびて、この平和な世に傘寿を過ぎる齢を恵まれている偉せは、只々神が幸運の籤を引かせてくださつたのであろうか。句集『花野』にはそんな感謝の思いを込めていたいと思つた。おこがましくも私心を許して頂けるなら 俳句は少なからずひとりよがりの自己満足である。それで良いのではと勝手に思つてゐる。そんな私の我儘俳句に貴重な紙面をいただき、あたたかく共感してくださつた多くの友人達には心の底から「ありがとう」の言葉を贈らせてください。

現代俳句の風 感銘十句抄

9月

藤井 久代選

現代俳句「列島春秋」 寄稿句

下の名で呼ばれ振り向く秋初め 石谷かづよ

5月 因幡路を麒麟獅子行く春祭 福田 七重

6月 一刷毛の水の匂ひや夏燕 坂出 徹

7月 手鏡に囚われ梅雨の月細し 滝本 勤

8月 老いの指ねずみ花火に艶めきて 原 あざみ

9月 北壁は朝雲脱がず葛の花 松本 美保

10月 絶壁に紅葉化粧の投入堂 渡辺をさむ

6月	現代俳句年鑑2021 感銘十句抄
行人のやや前のめりなる晩夏 石谷かづよ	堀 節誓 選
9月	遠い日の音色から小判草 中田 七重
10月	下の名で呼ばれ振り向く秋初め 松島美佐子
	転がつてゆく先無限檸檬の実 石谷かづよ
	夏休み海へ行つたきりのシャツターブ 滝本 勤
	遠い日の音色から小判草 中田 七重
	解体のあと静けさ風晚夏 松島美佐子
	下の名で呼ばれ振り向く秋初め 石谷かづよ
	転がつてゆく先無限檸檬の実 石谷かづよ

諸家近詠 五十音順

とりどりのマスクを並べ子の昼寝 はてさて角の無いのに鬼やんま 月光の孤島はびつくり箱である	足羽 鮮牛
そぞろ寒疫で覚えたギリシャ文字 雨の夜やたまゆらとなる虫の声 十五夜の連れは己の影法師	足立 六歩
ほつほつと初穂の素揚げ花ひらく 新米の香り快癒の朝の卓 オンライン面会を待つ昼の虫	石谷かずよ
松に問ひ松に応へて松手入 疫病へ何構ふるや曼珠沙華 鷲峰山へ道一本や蕎麦の花	植垣 規雄
向日葵の迷路ウイルス禍の迷路 虫しぐれ背凭れのない父の椅子 曼珠沙華白い一人が疾走す	岡 みづき
世の役に立たぬ日々にて秋団扇 木の実落ち夜汽車は音を長く引く 副反応てふもの憂しや菊膾	坂出 徹
小春日をベビーバギーの小さく跳ね 焙じ茶と柚餅子の似合う妻であり なみなみと秋夜の酒を牧水忌	定久しづ子

カンバスに暖色溢るる山の秋 スチールのベンチを隠し柿紅葉 人参も星型に切つてクリスマス	すむらのりこ
海釣りの竿の鈴鳴る鱗雲 おはぎ買う離ればなれのレジの列 蓑虫のぶらりともせざ夕日落つ	滝本 勤
疫病の日々を妖しく曼珠沙華 自由といふときには淋しきものよ秋 殉教の書を読みをれば残る虫	中田 七重
少年が蹴散らして行く曼珠沙華 小鳥来るみやげは何と問うてみる 接種待つ喜怒哀楽の額に汗	原 あさみ
新涼や長びいている立話 秋の夜の友より電話佳き知らせ 街路樹の根元に咲いて曼珠沙華	福田 七重
草原の心臓となり曼珠沙華 冷やかや縁切りてふを受けて立ち コロナ禍の仮面に潜む秋思かな	増井ゆり枝
単線の走る鉄橋秋の風 耳ふさぎてもあふれくる虫の間 曼珠沙華今年の修羅を咲かせをり	松島美佐子
日の暮れて虫の音凜とひびきけり 汽車の音家まで聞こゆ赤まんま 真つ直ぐに茎を立てゐる曼珠沙華	吉村 良子

編集後記

新型コロナウイルスの感染症はひとまず収まっているようにも思えますが、まだまだ油断はできません。この冬は第六波が来るのではないかと恐れられています。今号の諸家近詠にはこのコロナ禍に関連する句を一句お願いしました。もう以前ののような生活に戻れないであろう事を思いながら早い収束を願っています。



ちちら鳴く音き日コロナ棄民の死
コロナ禍に産声眩し秋は澄む
久保山忌非核航路の水脈あかり

渡辺をさむ

鳥取県現代俳句協会会報第49号

令和3年11月発行

発行人 植垣 規雄
発行所 鳥取県現代俳句協会
事務局 〒六八〇一〇八六三
鳥取市大覺寺一三三一〇九

電話・FAX (〇八五七) 二四一七六四〇
岡 みづき 方